

「市民政治学」

——高島通敏の平和研究——

市川ひろみ

はじめに

高島通敏（1933年11月16日－2004年7月7日）は、戦後日本を代表する政治学者の一人である。彼の提唱した「市民政治学」は、市民に平和をつくり出す主体となることを求めており、平和研究として捉えることができる。

高島は、1933年東京都に生まれ、戦争中は長野県に疎開していた。家庭が貧しかったため、中学生の頃から大学を卒業するまでの間、農作業の手伝いや家庭教師など様々なアルバイトをしていた。52年に東京大学に入学、56年の卒業と同時に法学部助手となった。61年に立教大学法学部助教授に就任し99年の定年まで勤めた。この間、65～67年には客員研究員としてイェール大学に滞在し、ロバート・A・ダール（1915～2014年）に師事し、当時はじまったばかりであった大型コンピューターを使った解析に取り組んだ。1977～79年に日本平和学会副会長、1980～82年には日本政治学会常務理事も務めた。99年から病気退職する2003年までは、駿河台大学法学部に務めた。

高島の政治学は、「政治の科学的な分析を可能にした計量政治学、政治の現場を踏査するフィールド・ワーク、市民自治の理念を柱とする政治思想、市民運動および市民活動の実践の間を架橋するスケールの大きな先端的な学問」だった⁽¹⁾。彼は、研究者としてのみならず実践家としても、「声なき声の会」や「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」では中心的な役割を担

(1) 『高島通敏集』（全5巻）の編者である栗原彬、五十嵐暁郎による「編集にあたって」。

うなど、市民運動にも大きな足跡を残した。

高島は、専門書・論文の執筆や翻訳のみならず、新聞（全国紙・地方紙）、『世界』や『思想』はもちろん『エコノミスト』『潮』『婦人の友』『地方自治職員研修』など数多くの専門誌や一般誌に寄稿している。これらの膨大な著作⁽²⁾は、高島が研究者だけでなく、幅広い市民に向けて仕事をしてきたことを表している。それは、「今、生きている人々の日常生活における幸せというものを大切に、それをよりどころに政治を判断するという基準が一般的になるということ」を目指すべきであると考えていた高島らしい仕事ぶりであった⁽³⁾。

本稿では、高島通敏が全人性をもってたどり着いた「市民政治学」に注目する。彼は、理論と現場を架橋し、自ら峻別していた公私の別を取り払うことで、一人の個人としての主体性を重視する「市民政治学」を提唱した。そして、自らの死の直前まで、市民が、自分たち自身が生きている社会に、その社会を変える主体として向き合うことを呼びかけ続けた。

1. 転向研究

《転向体験と共同研究》

「市民政治学」が生み出されるのに決定的であったのは、彼自身の敗戦時の「転向」体験と市民運動への関与、そして、学生との対話であった。高島の政治学研究の出発点は、転向研究である。高島が大学2年の時、講義ノートを見せてほしいと声をかけてきた年長の同級生に20歳の誕生日の記念にと誘われて、「思想の科学研究会⁽⁴⁾」に参加するようになった。ここで、高島

(2) 駿河台大学法学部の紀要『駿河台法学』（第19巻第1号）に15ページにわたって掲載されている。

(3) 高島『生活者の政治学』三一書房、1993年、18～19頁。

(4) 思想を経験科学的に研究する多様な専門分野の研究者による団体。1946年に鶴見和子、鶴見俊輔、都留重人、丸山眞男ら7名で設立し、雑誌『思想の科学』を発行した。

は生涯にわたって最も大きな影響を受けたという鶴見俊輔(1922～2015年)に出会う。そして、彼は最も若いメンバーとして転向の共同研究サークルに参加した。高島は、このサークルとの出会いは偶然のものであったが、転向研究に行き着いたのは「必然」だったと述懐している。必然は、敗戦時の彼自身の「転向」体験に行き着く。

敗戦の日に国民学校6年生だった高島は、「陛下に対して、神国を『鬼畜米英』に汚されたおわびをしなければならぬ」と子ども心にも思いつめ、「ぼんやりと死ぬことを考えていた」。模範的な軍国少年だった彼は、教科書に墨をぬらせた教師たちを軽蔑し、戦争裁判は力の裁判だと中学校の新聞に書いた。ところが同じ時期、高島は英語を習得するためとして、占領軍の宣教師による英語聖書クラスに通っていた。後に客員研究員としてイェール大学に滞在した際、高島は「日本語ができずにすみません」というアメリカ人に会い、自分は優越した文明の言語としての英語を学ぼうとしていたのだと気づくことになる。熱心にクラスに通ううちに高島は、アメリカ・デモクラシーの「信者」に変わっていった。「力に屈服したのではない。我々の天皇信仰、軍国主義が間違っていたから我々は負けたのだと納得するのは、心地よかった。私は占領を受け入れた⁽⁵⁾」のだった。

これが、自分の「転向」だったと気づくのは、彼が大学生になってからである。1952年に大学生となった高島は、安保闘争に際して、かつて模範的な級長であった律儀さと英語聖書クラスによって導かれた民主主義への熱意によって、級友たちを組織した。しかし、彼の必死の運動の成果は、無残にも全学連(全日本学生自治会総連合)指導部によって利用されてしまう。この時経験した無念さは、彼に、敗戦時の挫折体験を思い起こさせた。そして、「力に屈服しないと、大人の『転向』をあざけていた子どもは、理想を説く権力であったアメリカを受け入れたのだ」と思い至る。以来、日本人の「転

(5) 「アメリカ建国二百年と日本」『読売新聞』1976年7月6日、『高島通敏集5』203-204頁所収。

向」が高島にとって根源的なテーマになった⁽⁶⁾。

「思想の科学研究会」転向研究サークルは、1954 から 61 年にわたって毎週共同研究を行っていた。このサークルでは転向を「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」と定義し、共同研究にあたっては「決してその同時代の非転向者の場所に自分をおいてそこから裁くという態度をとらない」こととしていた。そして、研究者自身も転向と無縁でなく、研究者自身の「敗戦による翼賛思想からの転向、戦後の急進主義の挫折にともなう転向」を研究のための「補助線」とするとした。高島の最初の研究論文は「一国社会主義者—佐野学・鍋山貞親⁽⁷⁾」であった。

高島は、転向が単に外からの強制による敗北としてのみではなく、時代の変換期に際して内発的にかつ大量に発生したことを示して、近代日本の政治を特徴づけるものと捉えた。転向強要という国家の強制力の発動が、単なる行動の屈服にとどまらないで、しばしば思想的転向の糸口となった。日本においては、転向は、一つのイデオロギーから他のイデオロギーへの転換というより、あらゆる自立的「思想」を捨てて「無思想」の境地に帰ることとして自覚される場合が多く、「家族」や「郷土」に回帰することによって「思想」をすてるという発想が顕著であった。彼は、その起源を、キリシタンの弾圧（15～16世紀）にともなう「転び」にあるとしている。つまり、国家を超える思想原理を、日本という風土的・民族的な原理の名において否認するという論理において、後世転向史の原型を形作っていると考えたのだ⁽⁸⁾。

そして、1930～40年代のファシズムの世界的な嵐のなかで、日本では、共産主義者、左翼主義者、自由主義者が大量に転向し、非転向を守り抜いた人は数えるほどしかいなかった。このような現象は、高島によれば、まさに同時代の天皇制の制度原理と見合っていたのである。さらに、高島は、敗戦

(6) 脚注(5)と同じ。

(7) 思想の科学研究会編『共同研究 転向1 戦前篇』、平凡社、2012年、323～392頁に収録されている。

(8) 高島『政治学への道案内』講談社、2012年、469～471頁。

後の「一億総懺悔」による「平和と民主主義」への国家体制の転換を、日本人全体を巻き込んだ転向時代のしめくくりとして位置づけた。もっとも、新たな体制が天皇信仰という日本の特殊性を強調するものではなく、「平和と民主主義」という普遍的価値を志向するものであったかぎりにおいて、国家体制の枠を越える思想をはぐくんだ点を評価した。しかしながら、その普遍的な価値への志向が、敗戦にともなう上からの国体転換としてあったことに限界があり、高島によれば、戦後も、明治以来の日本の伝統的な思想パターンから基本的に変化していない。さらに、高度経済成長の下に体制の組織化は進み、生産力やテクノロジーの賛美を通じて、人々は、国家体制に近づいていくということになり、「マイホーム主義」に象徴される非政治的日常へと埋没し、国家を超える思想原理が育まれることはなかった。戦前・戦中のようなむき出しの権力によるイデオロギーの強制こそないが、転向の問題は、表面的な体制・反体制の問題よりも、思想形成の自立的基盤はなにかという、より本質的な意味での転向は、なお日本社会における本質的な問題であると指摘している⁽⁹⁾。

《小権力人と「非政治的」な主体》

後に、高島は、自らの転向研究について、「私たちは、反体制的言論で指導的立場にあるという意味での『公人』に焦点を合わせすぎたのであり、逆にこういう『公人』としての知識人が、立場のいかんを問わずそれなり的小権力人－疑似権力人であるというポイントについては、軽視していたという他ない」と振り返っている。彼には、60年代から70年代にかけて彼自身が携わっていた市民運動の体験から、「革命運動のスターリニズムを経験し、セクトの内ゲバ抗争をくぐりぬけてきた市民運動のゆるぎない実感」があった。この視点から見直せば、それ以前の転向研究で捉えられてきた政治的主体性とは、権力を統治したり権力を奪取したりすることを志すものの主体性

(9) 脚注(8)と同じ、472頁。

であった。転向研究の読み直しから見えてきたのは、そのような政治的主体から区別される、日常の小権力を拒否して非政治的な主体としての自己を守り抜こうとする主体である。この「非政治的」な精神や心情を核にしたところの「政治的」な主体としての市民こそ、市民運動にかかわる高島自身であり、高島の「市民政治」の主体となる市民である。

2. 市民運動

市民運動について、高島はスポーツをしている学生の質問に着想して「運動の政治理論」を著した。「運動と言っても、ちょっと運動してきた」というだけでは、スポーツか政治運動なのかわからない。高島は、英語の「movement」という言葉は静態的な社会制度や政治秩序に変動を引き起こす集団行動として捉えられるが、日本語の「運動」は、積極的主体的に「身体を運び動かす」ことであることに注目した。そして、運動を「働きかける相手を制度や役割から切りはなし人間的次元へ置きかえさせようとするだけでなく、運動者自身を人間的主体へと上昇させてゆく」ものとして位置づけた。つまり、運動を、働きかける相手のみならず、運動者自らも変わることを前提とする「対話」として捉えたのだった。さらには、「身体を運び動かしての全人的表現だけが、相手の中にまた人間的な感動や畏怖を呼び起こしうる」として、デモや座り込みなどの直接行動を、時には言葉以上に有効な表現と伝達的手段として評価し、自ら実行した。

世界的に市民による運動が広まった1960～70年代に、当時立教大学教授であった高島は、「声なき声の会」の活動を中心となって行うようになり、ベトナム戦争時には「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」を自ら呼びかけて活動した⁽¹⁰⁾。

(10) 軍国少年だった高島が平和運動にかかわるようになるのに大きな影響を与えたのは、高島が疎開先で読んだ『チボー家の人々』である。彼は、この中で描かれていたジャックの生き方に衝撃を受けた。ジャックは、第一次大戦時に反戦ビラをまきに行って死

「声なき声の会」は、「思想の科学研究会」で活動をしていた画家小林トミ(1930-2002年)が60年6月4日に「誰でも入れる声なき声の会」と書いた横断幕を掲げて、国会に向けて歩き出したことから始まった。当時の安保闘争では、デモは組織動員されていたため、個人で参加することはできなかった。そこで、小林が、個人が自由に自らの意思で参加することのできるデモを始めたのだった。「声なき声の会」という名称は、国会前に抗議のために集まった人々を目の当たりにした当時首相であった岸信介の、「デモをしているのは国民の一部で、声なき声は政府を支持している」との発言に抗議する意図が込められていた。

この「声なき声の会」には、主婦や子ども連れの母親、労働者、会社員、教員など多様な人々が参加するようになっていた。ある時、この「会」のデモが、学生と機動隊とが衝突する激しい闘争に遭遇したことがあった。この事態に、高島は「オバチャンたちを傷つけちゃいかん」と考えてデモの解散を指導した。これに対して「会」のメンバーから、「知識人として大衆を率いる責任を担っているという考慮があったのではないか、知識人の思い上がりがあったのではないか」と激しく抗議された。この厳しい批判こそ、高島に自らの権力性を自覚させ、自らの転向研究を見直すことにもつながった経験であった。

この「会」には大衆を導く「前衛」はなく、参加者それぞれが個人として自らの思いを表す場であった。参加者は、日常の生活を大切にして生活者として安保闘争後も反戦平和運動を続けていた。高島は20年間にわたって事務局を担い、「声なき声のたより」を発行した。彼は、市民運動について、表面的なスローガンやリーダーからではなく、内側の組織者としての立場か

ぬ。高島は、「こんな別の生き方もあるものかと心底、驚かされ、かつ感動した。そして、この本によって私のものの考え方が決定的に変えられ平和運動にもかかわるようになった」のだった。「私の人生を変えた一冊—『チボー家の人々』」、『日刊ゲンダイ』1981年7月24日、高島『政治学のフィールド・ワーク』三一書房、1989年、188～189頁、所収。

ら考えるようになったのも、この「声なき声の会」の事務局を担っていたことが大きかったと述べている。

ベトナム戦争に反対することは、高島にとっては「全存在をかけて行動」すべきことであった。日本は、米軍への基地・物資・人材提供によって、ベトナムでの破壊・殺戮に関与していた。高島は、1965年に鶴見俊輔に呼びかけ小田実（1932～2007年）を代表とする「ベ平連」の活動を始めた。この運動は、小田の言葉で言えば「みんなの『私』のもちより」によるもので、鶴見によると「手づくりで方法を工夫し、組織とすら言えないつながりをつくり、そのつながりもばらばらで・・・全体をとらえたひとはおそらくはない」という活動であった⁽¹¹⁾。反戦デモや米軍基地周辺での反戦カフェなど、参加者が自発的に活動した。助けを求めてきた米軍からの脱走兵を国外に逃す活動にも、多くの市井の人々が人知れず協力していた。高島もその一人だった⁽¹²⁾。

高島は、1960年代以降の市民運動を「近代市民社会が作り出してきた分業－専門化－職能のエートスと根本的に対立する人間の全人性に発する取り組み」として捉えていた。それゆえに、日常生活に腰を据えた女性が参加することに期待していた。1970年代中頃から、市民運動や住民運動、NPOやNGOによる活動が各地で生活に根づき、宗教・教育・福祉・スポーツ・消費者運動などの分野で広まっていったことを高島は評価していた。しかし、同時に彼は、市民運動が統治の担い手とみなされるようになり、現実性や政策思考が求められるようになることを懸念していた。それは、市民による運

(11) 鶴見俊輔「この本の出版について」関谷滋、坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社、1998年、494～495頁。

(12) 彼はある一人の「脱走兵」を自宅に匿ったが、後にこの「脱走兵」は米軍のスパイだったことが判明した。他の脱走兵が逮捕されるなど、高島にも官憲による調査は及んだと考えられるが、彼自身はこの件について何も語っていない。吉岡忍、立教大学連続シンポジウム未来の声を聴こう「市民、政治、そして政治学 高島通敏の眼」2010年11月27日、於：池袋キャンパス、<http://www.rikkyo.ac.jp/feature/sympo/2010/hougaku01.html>（2014年3月3日閲覧）。

動の可能性を狭め、権力者から「下請」として利用され、さらには、権力に寄り添うことにつながると考えていたからである。高島にとって、市民は「権力批判の永遠の基盤」であるべきだった。

60年代～70年代にかけて「多忙を極めた」市民運動の経験は、高島の政治学者としての問題意識を明確にした。彼は、研究の中心に最先端の政治理論ではなく、現代社会における市民を据えていくことを決意するようになった。

3. 自由人として生きる

高島は自らの死を前にして、卒業生ら親しい人々に向けて二通の「私信」を書いている⁽¹³⁾。この中で彼は、自らの祖先の生き様をとおして明治維新以降の日本のあり方を論じている。高島によれば、明治政府は専門教育によるエリート官僚養成を国家統合の一つの方法とした。しかし、旧幕地域の秀才は、官僚ではなく、医学、司法、教育、軍、ジャーナリズムを選ぶ人が多く、彼らは藩閥政府に対抗する拠点を形成した。高島は、これらの対抗勢力があったからこそ社会は多元化し、大正デモクラシーに至ったのだとして、権力に批判的であった人々の営みを重要視している。母方の祖父母の両家（東北の笠原家と信州の真田家）とも旧幕地域にあり、それぞれが明治政府におもねることなく、矜持をもって生きていたことを具体的な史実を示して書いている。社会主義運動への参加者は圧倒的に旧幕地域が多く、その中に貧しかった高島の父もいた。父は学費支援を受け東大に進学し、卒業後は新潟の小作争議の顧問弁護士となった。

(13) 李恢成宛私信(2004年4月25日)および鶴見俊輔宛私信(同5月19日)「あしがくぼ通信」、『高島通敏集5』340～352頁所収。この「私信」の前に高島は、「もし、あしがくぼ通信6月が送れたら、死神が今月は忙しかったのだと理解してください(いつまでも忙しいといいですがね)」と書き記している。高島は、およそ2か月後の7月7日に亡くなった。「あしがくぼ通信」は、高島が親しい人たちに送っていたたより。

高島が、政治学を研究する大学教授になりたいと父に告げたとき、「大学教授といっても宮仕えするサラリーマンではないか。我が家の伝統は、宮仕えしない自由人として生きることだ」と、父が怒ったという。その「家の伝統」について、晩年、高島は自らの人生を振り返り、次のように書いている。「私は、学者になりながらも、東大教授というエリートコースを自ら拒否し、いやはみ出てといった方がいいでしょう、市民運動の組織者としてまた市民政治学の構築者としての道を歩みつづけてきたのは、やはり、父、母から流れる家の伝統を体の中で深く感じているからでしょう⁽¹⁴⁾」。父には「家の伝統」にそむくと非難されたが、高島にとっての私立大学は、それぞれが建学の精神をもつ一つの運動体であり、社会に対するメッセージの発信基地であった。この死の直前の文章からは、自由人として生きる「家の伝統」に誇りを持ち、それを受け継いで生きたことへの自負が感じられる。

高島が大切にした「家の伝統」は、高島が20歳の時に出会った二人の師、京極純一（1924～2016年）と鶴見俊輔、東大法学部での指導教授であった堀豊彦（1899～1986年）の教えにも通底する。

京極と鶴見はともに、高島に既存の学界権威から独立し、欧米からの輸入ではなく、日本の現実に根ざす政治に取り組むように助言した。高島が、若き京極の最初のゼミ生となったのは「時間割の都合」で「全くの偶然」だった。京極は高島に、日本の大学組織や学界に安住せず、新しい知識の生産者、世界で評価される研究者を目指すよう鼓舞し、「いつも腰に包丁一本たずさえて、自分の腕を頼りに渡り歩く料理人の心意気に学べ」と諭した。京極は信仰あつくクリスチャンで、戦争中は陸軍兵士として戦場を経験していた。鶴見は、「思想の科学研究会」や「声なき声の会」、「べ平連」の活動で高島

(14) 自由人として生きることが「家の伝統」であると教えられていた高島が、エリート官僚養成を目的として設立された東大法学部に学ぶことは不可解な印象があるが、彼には他に選択肢はなかった。5人の子どもを抱えた「貧乏弁護士」だった父に、学費の安かった「東大を一度だけ受験させてやる、それに失敗したら高校卒で就職せよ」と宣言されていたからである。

と共に行動していた。彼には、1942年に留学先の米国から負ける側にいたいと日米交換船で帰国し、軍属としてジャワに勤務した際の「転向」経験があった⁽¹⁵⁾。

堀が指導教授となったのは、高島が丸山眞男(1914～1996年)に指導教授となることを断われたからであったが、それは、高島にとっては幸運であったであろう。高島は、丸山の没後、彼が指導した学生から汚職にかかわった次官級の官僚が複数あったことについて、丸山が公私を峻別し、職業倫理を不問にしたことと無縁ではないと次のように語っている。「丸山先生が、学問的方法論としてのウェーバーに固執されたのは、もちろん戦時中の皇道主義イデオロギーが支配した政治学への批判があったのは確かですが、他方では、価値判断が入らないということで、ゼミ学生の生き方に対する倫理的な責任を自分で解除するという側面があったことに、私はいまさらのように気づかされたのです」⁽¹⁶⁾。

堀は、ヨーロッパ中世の政治理論を専門としており、高島に最先端の計量政治学を指導することはなかった。しかし、堀の研究者としての生き方は高島の「家の伝統」に通じるものであった。堀の遺稿集『デモクラシーと抵抗権』(1988年)の編者—高島もその一人であった—は、次のように書いている。「この書名は先生の思想と業績を表すものとしてもっとも相応しいように思われる。(中略)それは、60年安保のおりには街頭デモの先頭に立たれ、またキリスト者平和の会を通じてひそかに平和運動への支援を惜しまれなかった先生の実践運動にも通じているように思われるのである」。この遺稿集に

(15) 鶴見は、帰国後、結核・カリエスの症状があったにもかかわらず、徴兵検査に合格したため、海軍軍属に志願し、ジャワのジャカルタ海軍武官府で勤務していた。その間に、捕虜殺害事件があった。命令されて捕虜を殺害したのは、官舎で自分の隣の部屋にいた軍属だった。彼は、もし、自分に「敵を殺せ」という命令が下ったらどうしていただろうかと、戦後も悩み続けたという。鶴見俊輔、上野千鶴子、小熊英二著『戦争が遺したもの—鶴見俊輔に戦後世代が聞く—』新曜社、2004年、52～55頁。

(16) 「鶴見宛私信」、「あしがくぼ通信」、『高島通敏集5』349頁所収。もっとも、彼自身も教員となった当初は、公私(大学での教育と市民運動)を峻別していた。彼の態度を変えたのは学生と向き合った経験であった。

は、堀が自らの師であった吉野作造（1878～1933年）について記した「この世の権勢に媚びず、屈せず、つねに正しい信念に堅く生きて歩きつつも、またつねに庶民と肩をいからすことなくともに歩かれた」という文章が掲載されている。堀のこの言葉は、彼の「弟子」である高島に受け継がれた。

4. 学生との「対話」

高島自身の転向体験と転向研究、市民運動の実践、それらを貫く自由人としての矜持をもって生きる「家の伝統」から、「非政治的」な精神や心情を核とした「政治的」な市民を主体とする市民政治学が導き出された。市民政治学の誕生に重大な影響を与えたのは、高島が接した学生だった。

立教大学法学部で教員生活を始めた当初、東大法学部の教育のあり方に極めて批判的だった高島は、東大に対抗するエリート学生を育てることを目指した。彼は、学問的に東大より先端の内容の厳しい授業を行い、「ついて来られない学生は容赦なく切り捨て」ていた。しかし、ある時「私は決して政治家や官僚になろうと思わない。ひとりの市民として暮らす、そういう私たちに必要な政治学を教えてください」と言う一人の女子学生に出会った。このような学生に接するうちに、高島の学生への向き合い方は変っていった。教科書としてはベストセラーとなった『政治学への道案内』⁽¹⁷⁾は、以前は「切り捨て」ていた圧倒的多数の学生のために、「よりましな教材」を提供しようとしたものである。

彼の教育者・研究者としての生き方が決定的に変化するのは、1969～70年である。彼は60年安保以来、「声なき声の会」の事務局長であり、また1961年秋以降は「思想の科学研究会」の事務局長として、65年には「ベ平連」の呼びかけ人として指導的な役割を担っていた。だが、彼はこれらの活動に

(17) この『政治学への道案内』は、1976年に三一書房より刊行され、改訂を重ねて2012年には講談社学術文庫となり、現在も読み継がれている。

ついて、一切学生に話すことはなかった。彼にとって市民運動は「私」の活動であり、「公」である大学での仕事とは峻別されるべきであった。教育者としての高島は、「半分仮面をかぶって学生諸君に接していた」のだった。

彼のそのような態度に対する痛烈な一打となったのが、69年にはじまった学生闘争だった。学生たちの主張は、高島が市民運動で主張してきたものと重なっていた。しかも、法学部の闘争における学生の主力は、彼のゼミ生だった。高島は、立教が他の大学のように機動隊を導入して学生を弾圧逮捕するようなことがあれば、即時辞職するという決心を固め、そのような事態を防ぐために奔走した。彼は、当時の学生に「大学を辞めたらタクシーの運転手になる」と話し、「ほとんど辞める決心」をしていたが、「思いもかけず」バリケードの自主解除に成功した。この時の学生との「約束」を果たすため、彼は自主講座、カリキュラム改革、社会人入試などの法学部改革に懸命に取り組んだ。

これ以降、高島は、エリートの学問と市民運動との二重生活をやめた。「私は自分が政治学において第一に追求するのは、市民政治学であるという旗印を掲げた。計量政治学は、私の副業になった」として、自らの全人性をもって市民政治学を提唱するようになった。

高島にとっては大学での授業は、学生との「対話」の場となった。学生は共に政治を担う主体であり、高島は学生と「平らな関係」を築こうとした。「先生」ではなく「ばたけさん」と呼びかける学生もいた。政治とは、あなたと私の相互関係であり、自分はどう生きるかを考えるべきであるというのが学生へのメッセージだった。立教の基礎文献ゼミは、週2コマ、助手と二人で担当するという濃密な内容であった。このゼミで高島は、学生一人ひとりが人間としての生き方を考えるために必要であるとして、仏陀や孔子、イエスの思想を共に読むようになった。彼によれば、この基礎文献ゼミは、「コンパと合宿ではじまり、やがて一生持続する教師と学生の共同体的な関係を生み出してゆく出発点」だった。帰宅できなくなった学生を自宅に泊めたり、

高島の家の用事も学生らに手伝ってもらったりする関係であった。卒業生の相談にも継続的に対応していた。20年以上前の教え子で町議会議員となっていた卒業生が暴漢に襲われた時、高島は入院先に彼女を見舞っている。彼女はショックが大きく、まだ何をしたいかわからないでいる状態の時に、暴力にどう対処すべきか、メディアにはどう対応すべきかなどを、適切かつ具体的に助言を与えた。彼女にとっては、日常の議員活動においても、資料収集の方法などについて「一緒に考えてくれた、有り難い存在」だった⁽¹⁸⁾。そして、高島にとっても学生は大切な存在であった。彼は、晩年自らの古希記念パーティに参集してくれた卒業生らの想いに触れて、「教師を続けることができた幸せ」を感じていた⁽¹⁹⁾。

5. 市民のための政治学

《市民政治学》

高島の市民政治学は、市民にとって必要な政治学であろうとした。市民政治学は、まず、指導者と大衆、職業としての政治家と一般市民という二分法の思考方法を疑うことから始まる。そのため、政治学者は、「政治学者として」という限定からはなれて一人の市民として政治へかかわる姿勢が求められる。市民の立場から、権力構造を見るということは、それをどのようにして究極的に廃絶するかという展望の下に必要な知識や技術を構想し分析を進めるということである。ましてや、政治学は支配者や指導者のために仕えるものではない。

注目すべきは、高島が、政治学は、権力批判に役立つという位置に止まりえないとしていることである。彼は、「こういう〈解毒剤〉的位置に自らを置くことが、いかに〈挫折〉と〈禁欲〉によって支えられているにせよ、究

(18) 埼玉県嵐山町議会議員渋谷とみこさんへの電話でのインタビュー（2015年11月16日）による。

(19) 「あしがくぼ通信」『高島通敏集5』、338～339頁所収。

極的には専門への逃避の口実として、むしろ保身の役割をはたしているのが現実の機能なのである」と、「専門家」に厳しい眼差しを向ける。高島には、60年代以降、運動形態が人々の間で基礎をもちえなくなったのは、職業的機構への埋没的忠誠としての「組織人の自覚」が進行したからであるという認識があった。組織人として「専門家」に逃避することで、一人の市民としての責任から免れ、自らの地位を守ることを可能にした。この「組織人の自覚」がもたらす、一人の市民としての無責任さは、高度経済成長期に相次いだ公害や薬害被害を引き起こした企業や監督官庁の「責任者」らの責任が問われることがなかった日本社会のあり方にも表れている。

高島の批判は、戦後のエリートたちが、非政治的な個人としての良心を、公的な「良心」から切り離れたことについても向けられた。支配者の一員であり、権力の末端機構にある大学教授や裁判官が良心を持ち出すとき、それはいつも「学者としての良心」、「法律家としての良心」であって、身分保障や同僚集団による自治の主張と密接に結びついていたと断じた⁽²⁰⁾。そのような職業人としての「良心」は、一人の市民として考える責務を放棄させる効果があった。そして、一人の市民としての「私」の良心は不問に付され、自らの良心に背くような行いも正当化されてしまう。

他方、彼は、権力をもたない人々が、「国家に寄りかかる大衆」になることに強い危惧を抱いていた。「生活が断片化し、空洞化し、生活から意味が失われると、その意味を求めて、人々は“帝国の偉業”であるとか“民族の栄光”といったナショナリズムが与える安っぽい言葉に飛びついて、自分たちの心の空白を埋めよう」とする。だからこそ高島は、「自分の身近な生活のなかから連想し、身近な生活の枠のなかで政治を切り取る」まで成熟しつつある市民に期待した。

(20) 高島『政治学のフィールド・ワーク』三一書房、1989年、211～212頁。

《地方政治》

人々にとって身近な地方政治を、そこでの主体的な参加をぬきにして民主的な政治を語ることはできないとして、高島は重視していた。高島が、数ある著作の中で最も気に入っていたという『地方の王国』（三一書房、1986年）は、『潮』に隔月で連載された文章をまとめたものである。高島は、この連載のために2年近くの間、40日あまりをかけ、北海道から鹿児島に至る六つの選挙区を訪れ、150人近くの議員や秘書、地方在住のジャーナリストにインタビューした。当事者の声、人口や平均所得、進学率、気候・歴史風土、選挙での得票数などの統計、政治学の理論をもちいて、地方政治の課題を鮮やかに描き出した。この書は、優れたルポルタージュであり、それぞれの地域に住む市民に向けた、高島からの叱咤激励の想いが込められている。

高島は、1963年から選挙の度に日本各地の現場に出歩くことを習慣としていた。高島は、自らが最先端を歩んでいた計量政治学を用いて選挙分析法「二次計画法」を開発し、これを用いて選挙ごとに分析した。その選挙分析に基づく論稿の多くは、新聞や雑誌に掲載され、アカデミズムのみならずジャーナリズムにおいて選挙分析とそれに基づく政治評論を主導した⁽²¹⁾。その中で高島は、政治家や官僚にも温かい眼差しをむけ、厳しく批判すると同時に丁寧に代案や改善策を提示していた。

《平和研究としての「市民政治学」》

高島の考える平和研究 Peace Research は、平和を実現するための応用科学であった。彼は、立教大学法学部で「平和研究」講義を1991～97年の間に担当していた⁽²²⁾。この講義の中で高島は、世界の平和を国内政治過程から捉え、受講生に自らの住む社会で平和のために実践することを求めている。

(21) 『朝日新聞』に1980年1月20回にわたって掲載されたコラムは、選挙担当記者にとっての選挙分析のバイブルとなった。椎橋勝信（元毎日新聞論説委員）『高島通敏集3 現代日本の選挙』280頁。

(22) この時の講義ノートは、2005年に『平和研究講義』として出版されている。

講義の最後に高島は、徴兵制に代わるものとして平和部隊や国際ボランティア活動を提唱していた。自衛隊を増強するかわりに、数万の規模をもつ平和部隊を創設し、災害や戦火に見舞われた地域の医療や復興、民生のために、国際的に常時派遣していたら「金だけ出して人を出さない」式の批判に怯えることもなかったはずだと主張した⁽²³⁾。平和をつくり出すには行動が不可欠であり、市民がその担い手となる必要があると考えていたからである。彼は、この社会を構成する市民が、「非政治的」な主体として日常生活における幸せを大切に判断し、行動することに期待した。「私たちの政治の世界も、人間がつくっている世界です。私たちが、そういう視点で政治の世界に立ち向かうとき、それまで溶けがたい固い塊だと見えていたものが溶けだすということが起こりうる。そういう視点をもって政治の世界に向かうこと、それが市民のリアリズムの立場ではないかと私は思います⁽²⁴⁾」という彼の言葉は、「市民政治学」への高島の強い思いを象徴している。

2001年9月11日に米国で起こった同時多発テロ事件に対する、米軍・有志連合軍による「対テロ戦争」の最中であった2003年11月、高島は、ゼミの卒業生を対象に立教大学で講演を行った⁽²⁵⁾。アフガニスタンへの攻撃やイラク戦争をはじめ、むき出しの暴力の横行、地球環境の悪化、資源の枯渇など、人類が直面している世界的な困難に対して、市民政治こそが「21世紀に残された人類最後の希望」であると説いた。そして、「下から一步一步積み上げてゆこうという市民政治による改革は、時間のかかる迂遠な道であることは間違いありません。しかし、暴力や強制に訴えることなしに、人類の連帯と共生の精神に頼って課題に立ち向かおうという市民政治の実現以外に、私たちに残された道がないことだけは確かなのです」と、結んでいる。これは、自らの余命が長くないことを覚った高島が、これから生きていく人々

(23) 高島『生活者の政治学』、65～66頁。

(24) 高島『政治学への道案内』講談社、2012年、84頁。

(25) この時の講演録は、岩波ブックレット『市民政治再考』2004年3月として出版されている。

に託した、悲痛な、しかし、確信に満ちたメッセージである。

おわりに

高島にとっては、研究と運動は別のものではなく彼の全人性をかけて取り組むものだった。彼の生き方を貫いていたのは、権力への強い不信と警戒であった。それは、少年時代に強いものに自らなびく大人たちを軽蔑していた自身の「転向」という痛烈な体験に根ざしていた。そして、自らの行動を主体的に選択しないことへの危機感は、彼の精力的な研究・市民運動の原動力であった。

現在、「対テロ戦争」の主戦場とされたイラク、アフガニスタンでは、15年以上経った今も暴力は静まらず、混乱が続いている。破壊と殺戮は拡散し、世界各地でテロ攻撃は拡大している。「市民運動」による成果と期待された「中東の春」は、無残な状況に陥り、難民の急増をもたらしている。日本に住む多くの人びとも、急激に多方面で拡大・深化するグローバリゼーションによる過酷な競争、急速な格差の拡大に直面するようになった。さらには、核保有国同士の威嚇・非難の応酬が激化し、世界的な危機的事態となっている。このような状況にあって、市民政治学はどのような展望をもつことができるのだろうか。

現在の日本では高島が危惧した「国家に寄りかかる大衆」と「唯一の道」として方向性を示した「市民政治」が相克している。匿名の存在である「国家に寄りかかる大衆」は、現在の日本ではインターネットの言論空間で無数に「活動」している。現実社会においても、日本礼賛本、嫌韓・反中国本が書店に平積みされ、「外国人は出て行け」とする排外主義的なヘイト・スピーチやヘイト・デモが横行している。日本政府は、隣国からのミサイル発射後にJアラートを発令し、しゃがんで頭を手でおおう「避難」訓練を繰り返している。それは、否応なしに人々の不安と恐怖感を強めており、人々に「国

家に寄り」かからせることにつながっている。

一方で、「非政治的」市民としての精神を核とした「政治的」主体としての市民も存在感を増している。近年、日本では市民を政治の主体として尊重しない政治が強化されてきた。2014年7月1日の閣議決定による憲法の解釈変更によって集団的自衛権を発動することが可能とされ、15年9月19日には国会で強行採決された安全保障関連諸法が成立した。このような政治に対して、「SEALDs (自由と民主主義のため学生緊急行動)⁽²⁶⁾」が結成され、多くの若者が参加した。これに触発され、中高年による MIDDLEs や OLDs、高校生らも次々に路上に繰り出した。SEALs の学生たちは、それぞれ自分の所属する大学名と名前を明らかにして、自分の言葉でスピーチしている。「水着とかマツエク (まつげエクステンション) いつ着けるかとかで悩んでいる人間が、政治について口を開くことはスタンダードであるべきだと思うし、スタンダードにしたい」というあるデモ参加者の言葉は、高島の生活を中心にすえた非政治的な「市民」像と響き合う。また、1万4千人を超える研究者が「安全保障関連法に反対する学者の会⁽²⁷⁾」に賛同した。この「学者の会」では、各研究者が専門に閉じこもることなく、立憲主義や民主主義、安全保障について意見を表明した。多くの研究者や教員が SEALDs と共に活動し、シンポジウムや集会では、学生と対等の参加者として発言した。一人の個人として行動する彼らは、高島が希望を寄せた市民政治を実践していると言えよう。

樋口陽一(憲法学)は、「安全保障関連法に反対する学者の会」主催のシンポジウム(2015年10月25日)で、「良質な専門家ほど、世間一般に影響を及ぼす発言には慎重になる。だが、人々の運命を左右するような時に『危

(26) 「SEALDs (自由と民主主義のため学生緊急行動)」ホームページ。http://www.sealds.com/ (2017年10月30日閲覧) 2012年特定秘密保護法案への反対運動から活動を始めていた。2016年8月15日、活動に区切りをつけ解散した。

(27) 「安全保障関連法に反対する学者の会」ホームページ。http://anti-security-related-bill.jp/ (2017年10月30日閲覧)

ない道だよ』と示すのは専門家の義務」と発言した。高島であれば、「一人の市民としての責務」であると呼びかけたであろう。「職能の意味の問い直しによる日々の主体的選択としての職業人としての自覚」をもたず、専門領域に閉じこもってはいは、一人の市民としての責務は果たせない。自ら「転向」を経験し、平和をめざして実践してきた高島からの箴言である。

参考文献

- 高島通敏『政治の論理と市民』筑摩書房、1971年
- 『政治学のフィールド・ワーク』三一書房、1989年
 - 『生活者の政治学』三一書房、1993年
 - 『市民政治再考』岩波書店、2004年
 - 『政治学への道案内』講談社、2012年
- 高島通敏著、五十嵐暁郎、佐々木寛編『平和研究講義』岩波書店、2005年
- 栗原彬・五十嵐暁郎編『高島通敏集1 政治理論と社会運動』岩波書店、2009年
- 『高島通敏集2 政治の発見』岩波書店、2009年
 - 『高島通敏集3 現代日本の選挙』岩波書店、2009年
 - 『高島通敏集4 現代政治の構造転換』岩波書店、2009年
 - 『高島通敏集5 政治学のフィールド・ワーク』岩波書店、2009年
- 小林トミ著、岩垂弘編『「声なき声」をきけ』同時代社、2003年
- SEALs(自由と民主主義のための学生緊急行動)編著『民主主義ってこれだ!』大月書店、2015年
- 田口富久治『「高島通敏集」全五巻を読む』『法政論集』235号、2010年
- 高橋源一郎、SEALs『民主主義って何だ』河出書房新社、2015年
- 2010年立教大学連続シンポジウム未来の声を聴こう「市民、政治、そして政治学 高島通敏の眼」早野透、吉岡忍、2010年11月27日於：池袋キャンパス、<http://www.rikkyo.ac.jp/feature/sympo/2010/hougaku01.html> (2014年3月3日閲覧)
- 堀豊彦『デモクラシーと抵抗権』東京大学出版会、1988年
- 付記 本稿は、拙稿「高島通敏－平和研究としての市民政治学」初瀬龍平・戸田真紀子・松田哲・市川ひろみ編『国際関係論の生成と展開－日本の先達との対話』2017年、206～218頁に、紙幅の都合上割愛した部分を加筆し、修正したものである。